

2023年12月3日

「信じて待つ」

ヨハネによる福音書 5:36-40

竹島 敏牧師

イエスを迫害したユダヤ人たちは、イエスを自分たちが待ち続けていたはずのメシアであることに、気づくことができませんでした。それは、聖書に預言されている救い主に対する自分たちの頑なな願望のためでありました。だから、神を「わたしの父」と呼び、数々の奇跡の業を行うイエスの姿を見ても、その奇跡の業そのものが、神が遣わした者の証であると悟ることができず、イエスを神が遣わした者であると信じるができなかったのです。そして、神を父と呼ぶイエスを不遜な者として憎悪し、消し去りたかったのでありましょう。では、この待降節に救い主を待ち望む私たちはどうなのでしょう。神はひとり子をこの世に賜い、十字架の主は私たち人間の全ての罪、痛みも苦しみも背負ってくださいました。しかし私たちが生きる世界は分断され混乱し、争いが絶えず、より罪深くより痛みも苦しみも多いものになってしまっています。イエスはいったい何をしておられるのかと、問いたくもなりません。

主の十字架はもしかしたら、私たちの罪や痛みが「全てなくなる」、という意味ではなく、「共に背負ってくださる」ということだったのかもしれない。そうだとすれば、神は私たちに何かを促しているはず。神の似姿として創られた私たちを用いて、この世界の歴史を形成されようとしているはず。ますますずっと重くなる荷を担い、痛みも苦しみも深めつつ憐れみに満ちたまなざしで私たちを見つめておられるはず。アドベント・クランツに灯された光の中にそのような主イエスのお姿を見出し、平和の主の手の業に仕える志をもってこの待降節を過ごすことができますように。